を特に留意せられなければならない。

従來、極地に關する文獻は――邦書たると洋書たるとを問はず――その殆んど悉くが單なる探檢記であり、極地自然の說明であり乃至は自國領土を正當化せんとする領有問題に關するものに過ぎなかつた。本書こそは此等舊來の類書とは全くその由來と趣を異にする。人はあらためて本書により極地そのものの認識を新にするであらうし、又斯くも明快適確なる日本地政學の展開に驚異の眼をみはらずにはおられないであらう。皇道世界維新實現に當り日本國民すべての精讀を庶希したき著書である。（寫眞地圖豐富、A五版一八一頁、白揚社刊、定價貳圓）（藤野森明）

美術樣式論

リーグル著・長廣敏雄譯

先づ何よりも菊版五〇〇頁の大譯を完成された譯者に敬意を表したい。何となれば、「手頃」であることが、內容においても定價においても第一の標準であるらしい出版界にあつて、本屋の注文によらず孜々として、しかもこの「名著」を譯することはさう容易なことではないから。名著を譯してこそ學界に寄與するのである。リーグルの名を云云すれども、それを通讀せる人は幾人あるかと思へる程に多忙らしい學界にあつて、名著を通讀する事はこの譯書によつて甚だ容易になつた。原本はやゝ古いとしても、それは新しい手頃な書よりも遙かに生命があるし、また何よりも學者の態度を教へてくれやう。

それならば何故に名著であるか。それは學術の發展に記念碑的な業績となれるものであつて、この場合にはセンペル、グッドイーヤー、フルトウエングラー、そしてリーグル、次いでラングロッツ、ブショウと美術考古學の發展を劃するものであるからである。しかし更にこのリーグルの著そのものが如何なる意味において名著であるかについては、譯者が卷末に付してゐる「リーグルを讀みて」に盡きてゐるから、私は加ふべき何物もないのであるが、そしてまた許された所定の頁數內では不足であるが、彼リーグルの立場たる歷史的、發展的なそして「超個人的にして、時代と社會とを含む藝術意欲」（四七六頁）はここに明かであるし、またその「世界史的」な態度はこの裝飾文樣を取扱つても充分に、否專ら世界史的な立場から說かれてゐる。今や「世界史」は人々の關心事であるが、「世界史的」であることは歷史家考古學者にとつてより緊急なより根源的なものであると私は思ふが、それをばこの書は充分に教へてゐる。主として植物文樣就中唐草文樣についての叙述であるとても、以上の二つの點によつて如何にも生き〳〵と何人にも關心をそそる。

今更らに本書の內容を述べるのも恥しき次第ではあるが、紹介のために略述すれば、第一章幾何學的樣式の重心はこの樣式が織物起源でないこと、またそれが各地において發生せることを例證し、今日ではこの說は定說となつてゐる。第三章「植物文樣の始源と唐草文樣の發展」は半以上を占め、その內でも「ギリシア

美術に於ける植物文樣」が大部を占めてゐる。彼の時代にはまだクレタ文明が發見されてゐないので、ミケーネ文明とクレタ文明とを混同して、自由なる植物文にギリシア精神の自由の產物を見んとするが如き（一八三頁以下）また埃及の影響を稍々過重してゐるやうな缺點はあるが、アッティカ式以後についてはその優れた直觀と探究とは今日も充分に輝いてゐるのである。彼によれば古代東方、殊に埃及に見られる植物文樣がそこより西亞に移り、ミケーネ式にロータス樣式などを經て、古アッチカ初期樣式に生成し、材料としては埃及のロードスからやがてギリシアの特產たる唐草、更にその獨創たるアカントス文樣を生むに至る。そして更にこのギリシア式植物文はヘレニズム、ローマを經、ビザンツ美術、初期サラセン美術に迄美事に辿られてゐる。以上の推移は單なる叙述ではなく發展史である。

譯書である限りは譯文如何が問題であるが、青樓と同じく譯文もたたけば如何程でも埃が出るものであるが、數年に亙つて琢磨推敲されし蹟は歴然たるものありて、行文易々として稱して佳譯と言ひ得ると思ふ。殊に術語においては多少の議論あるものありとしても譯者の苦心の程が察せられる。ともあれ、表面的な方法論的批判が唯一の讀書であるとは思はざる、敬虔なる學徒はこの書より、また多大の方法論の方面においても教へられやう。（四八〇頁、定價七圓八拾錢、座右寶刊行會發行）（村田數之亮）

彙報

史學研究會例會

六月十三日（土）午後一時半、文學部史學科第一教室に於て開催

蒙古逸史考　本學部講師　石濱純太郎氏

民謠紹介　文學士　平山敏治郎氏

石濱氏講演。蒙古逸史はもとの南京維新政府の外交部長であつた陳籙氏が嘗て庫倫在任中、蒙文原本から譯させて自ら筆錄したもので、蒙古の先世から始まつて清の道光九年に終る蒙古史である。而して蒙古逸史のもとゝなつた蒙古文本は「エルデニ・イン・エリヘ（寶の珠數）」であらうといふことはかつて藝文十卷七號に發表したところである。その後、陳氏の「止園筆記」二册を獲たが「奉使庫倫日記」卷二の條に、逸史翻譯の事を記したと思はれる條あり、それにはその蒙文原本の題を「保樓」としてゐて、寶の珠數（エルデニ・イン・エリヘ）」とあはない。或はエリヘをエルヘ（威樓）とあやまり、寶樓と譯し、それを陳氏が「保寶樓」、略して「保樓」と保の意を補つたものであらう。

平山氏の紹介せし民謠錄音盤左の如し。

（〇印　町田嘉章氏採集）

田之神踊歌　飛騨益田郡下呂町森　八幡神社神事